

形態アクセント論的一考察：複合語アクセントと語 構成・連濁をめぐって

木部，暢子

<https://doi.org/10.15017/12089>

出版情報：語文研究．46，pp.41-49，1978-12-01．九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

形態アクセント論の一考察

——複合語アクセントと語構成・連濁をめぐって——

木 部 暢 子

一、はじめに

アクセント研究は、アクセントそのものの研究もさながら、形態的な研究をすることによって、より価値が広がる。例えば複合語や派生語における語頭式（注1）の所謂金田一法則は、語源研究に大きく役立ってきた。複合語アクセントの更なる研究は、語源研究にとって最も有効な手段だと思われる。金田一法則に限らず、複合語アクセントから得られる語源の情報は、語源解明の上でもっと大きな貢献をするのではないか。また複合語アクセントの研究は、アクセントの体系的変化や複合度を考慮することによって、複合語の成立時代を推定するのにも役立つ。その他にも、文法的構造を明かにしたり、狭義の音韻の明かにできない部分を補充したりすることができる。例えば、動詞連用形と連用形から派生する居体言の問題にしても、両者は異なるアクセントを持つので、アクセントを利用すると両者を区別することができる。名義抄における「タチガレ（注2）（立枯）」は〇●●型アクセントを持つので、「タチ」は居体言ではなしに動詞連用形の段階である、という具合に。また連濁は全ての複合語に

起こり得るわけではない。それに対しアクセントは全ての語が持つわけであるから、連濁の穴を埋めることができる。

このように、複合語アクセントの研究は多方面に亘って効果的である。本稿ではまずその手始めとして、複合語アクセントと語構成との関係、複合語アクセントと連濁との関係の二点から、形態アクセント論的考察を試みたいと思う。なおその場合、できるだけ複合語成立時代に近い資料の方が有効である。従って資料としては、平安時代末期アクセントを反映する『類聚名義抄』を使用することに

二、資料について

資料として、中心的には観智院本類聚名義抄を使用する。補助資料として、図書寮本・高山寺本・鎮国守国神社本の諸本類聚名義抄を使用する。が、濁点表記については諸本で加点態度の異なることがあるので、その場合は用例数の多いという点で観智院本を中心にした。ただし加点の正確な図書寮本と常に比較はしてある。

底本は次のものを使用した。天理善本叢書『類聚名義抄』 勉誠

本稿で取り扱うのは、四音節・五音節の名詞と動詞である。そのうちでも四音節名詞が用例も多く、中心となる。

三、語構成と複合語アクセント

(I)複合名詞 複合名詞の語構成を次の五つに分類する。

- (1) 名詞＋名詞
- (2) 形容語語幹＋名詞
- (3) 名詞^{注3}＋居体言
- (4) 居体言＋名詞
- (5) 居体言＋居体言

(1) 名詞＋名詞・(2) 形容詞語幹＋名詞 この語構成を持つ複合語は、いろいろな型のアクセントを呈する。いろいろなと云っても、複合語を作る時に先部要素が全平化するという一般的特色は見

をあらわすもので、やはり連体修飾関係にある。

- 名詞十居体言 この語構成を持つ語は、複合語アクセントに常に特色がある。このような語は、複合語アクセントが全平調傾を示す。次に用例の一部を挙げる。
- アシナへ(痿) $\parallel$ 平平平平平 (法下 122・5)
アシマキ(脛) $\parallel$ 平平平平平 (法中 126・1)
アシワケノツクエ(足別案) $\parallel$ 平平平平平 $\times \times \times$ (仏下本山・4)
- イロトリ(采) $\parallel$ 平平平平平 (仏下本 89・6)
カミアゲ(神今食) $\parallel$ 平平平平平 (僧上 104・6)
カミガキ(収) $\parallel$ 平平平平平 (僧中 51・6)
カミゾリ(剃刀) $\parallel$ 平平平平平 (僧上 93・8)
カムザシ(簪) $\parallel$ 平平平平平 (僧上 62・4)
クツヒキ(卧織) $\parallel$ 平平平平平 (法中 135・3)
シリカキ(鞞) $\parallel$ 平平平平平 (僧中 72・7)
スミカキ(谿) $\parallel$ 平平平平平 (僧上 124・6)
スミザシ(心) $\parallel$ 平平平平平 (僧上 78・8)

ツチスリ(腴) || 平平平平平(仏中116・1)

ホコトリ(弄槍) || 平平平平平(仏下本54・1)

ムマカヒ(馬子) || 平平平平平(僧中98・6)

春美須利(硯) || 平平平平平(図153・5)

カザキリ(翫) || 上上上上上(僧上98・6)

カナカキ(鈎) || 上上上上上(僧上123・4)

カナシキ(鐵落) || 上上上上上(僧上138・7)

カムダチ(麴) || 上上上上上(仏上71・6)

クラシキ(鞍褥) || 上上上上上(僧中72・6)

スソツケ(襦袢) || 上上上上上(法中145・6)

ミヅカキ(殘) || 上上上上上(法上79・4)

比良波利(糸) || 上上上上上(図283・2)

これに対して全平調でない例もいくつか報告される。

マリウチ(拍毬) || 平平平平平(僧上102・5)

ハマハヒ(舅荊) || 平平平平平(僧上14・1)

ハラマキ(勒肚巾) || 平平平平平(法中102・4)

ユビマキ(鐙) || 平平平平平(僧上131・3)

カデトリ(櫛師) || 上上上上上(仏下本112・8)

ヒデマキ(簪) || 上上上上上(僧上123・3)

しかしこれらの例外は、割合から言うとき少数であるので、大体の傾向として「名詞＋居体言」の複合語は全平調になりやすいと言うことができる。

以上は四音節名詞の場合であったが、五音節名詞になると事情は少し変わってくる。

カレヒツケ(鞍鞆) || 平平平平平平(僧中73・5)

クサアハセ(闌草) || 平平平平上平(法下83・2)

オビシバリ(腰) || 平平平平上平(仏中139・6)

ムギスクヒ(爪籬) || 平平平平上平(僧上79・7)

アブラビキ(取毛) || 平平平平上平(僧中51・7)

カバミカケ(鏡臺) || 平平平平上平(僧上137・6)

イシハジキ(槍) || 上上上上上平(僧中29・5)

サキバラヒ(前趾) || 上上上上上平(僧中101・3)

トコシバリ(轉) || 上上上上上平(僧中76・3)

トリアハセ(闌鳥) || 上上上上上平(法下83・2)

ヒトタマヒ(副車) || 上上上上上平(僧中83・8)

モノガタリ(話) || 上上上上上平(図78・1)

というように、マイナス二拍め契機のものが多い。四音節名詞における全平調、五音節名詞におけるマイナス二拍め契機の型はどういう意味を持つかと言うと、これは安定型アクセントである。安定型アクセントとは、四音節名詞なら四音節名詞の中で、所属する語彙数の最も多い型を言う。観智院本類聚名義抄の調査では、全四音節名詞549例のうち○○○○型は146例で最も多く、●●●●型は82例で二番めに多い。同じように五音節名詞では、最も多い型が●●●●○型(55/240)、次に多いのが○○○○●型(51/240)となっている。このように所属語彙数の多い型は、何らかの意味で発音しやすく、安定的な発音を持ったものだったろうと推測されるので、安定型アクセントと呼ぶことにする。

ところで、「名詞＋居体言」は、連用修飾関係を作る。連用修飾関係と言ってもその内容はさまざまである。例えば「アシワケ(足別)」や「イロトリ(采)」、「カミゾリ(剃刀)」、「カザキリ

「(髷)」などは目的格の「ヲ」助詞を補い得るであろうし、「カムダチ(麴)」では主格の「ガ」助詞を補い得るであろう。また「ムマカヒ(馬子)」や「カヂトリ(機師)」などは「ムヲ……スル人」という意味になる。しかしいずれにしても、(1)や(2)が連体修飾関係だったのに対し、(3)は連用修飾関係を作る。

この二つの事実を考え合わせると、「名詞+居体言」の語構成を持つ複合語は、連用修飾関係を作り、安定型アクセントを持つということが明かになる。

(4) 居体言+名詞 これは次の二つの場合に分けて考えた方がよさそうである。

(i) 後部が先部の主語となるようなもの

タチガミ(髻) 〓平平平平 (仏下本 33・1)

ハネムマ(駢) 〓平平平平 (僧中 107・5)

モエクヒ(爐) 〓上上上上 (仏下末 41・3)

ニゴリザケ(麴) 〓平平平平平 (僧下 56・4)

ニオヒウマ(駄) 〓平平平平平 (僧中 100・4)

ナリビサコ(瓢) 〓平平平上上 (僧中 6・2)

マガリカネ(曲尺) 〓上上上上平 (法下 92・2)

(ii) 後部が先部の目的語などとなるもの

アヘモノ(塵) 〓平平平平平 (法下 39・4)

キリクヒ(杵) 〓平平平平平 (仏下本 91・5)

クミナハ(辮) 〓平平平平平 (仏下本 124・1)

ヤキゴメ(糲) 〓上上上上上 (法下 33・6)

ヤキハタ(曝) 〓上上上上上 (仏中 109・4)

カケナハ(胃索) 〓平平上上平 (僧中 10・2)

サシナベ(銚子) 〓平平上上 (僧上 125・7)

サシグシ(刺櫛) 〓平平平上 (仏下本 115・1)

ハキクツ(掃) 〓平平平上 (仏下本 45・7)

ヒキオビ(衿) 〓上上上上平 (法中 144・8)

ヲシカハ(串) 〓上上上上平 (僧中 81・2)

(i)は全平調になる場合が多く、(ii)はさまざまである。(i)と(ii)のちがいは、単に成素の原アクセントのちがいのみによるものだと考えられない。「タチガミ(髻)」と「サシグシ(刺櫛)」。「サシナベ(銚子)」。「クミナハ(辮)」は、どれも原アクセントは同じであるのに、異なる複合アクセントを作っている。それが(i)と(ii)との語構成上の問題かどうかは速断しかねるが、明かに(i)では全平調傾向が見られる。

修飾関係は、(i)も(ii)も連体修飾関係が成立している。

(5) 居体言+居体言 これは用例が少なくて傾向を見つけ出すことはできない。しかしどれも先部の居体言は全平化しておらず、動詞連用形のアクセントを残しているふしが強。

以上の結果をまとめてみると、語構成により複合語アクセントが異なったあらわれ方をする。特徴的なのは「名詞+居体言」の場合と「居体言+名詞」の主述関係の場合で、これらは安定型アクセント傾向を示す。複合語が安定型アクセントになろうとするのはどういう意味か。それは、耳慣れないことばを「基本型アクセント」で発音するように、複合度が強くない、複合して間もないことばを安定型アクセントで発音しようとしたためではないかと考える。従って安定型アクセントになるこれらの語は、まだ複合度が弱かったと思われる。

一方、「名詞＋居体言」は連用修飾関係を作ること、先に見てきた。この連用修飾関係の複合語が安定型になるとすれば、連体修飾関係の語より連用修飾関係の語の方が、複合度が弱かった、あるいは複合して間もない語だったと言いうことができるだろう。同じように、連体修飾関係の複合語でも、その中に主述関係の成立する場合には、複合度が弱かったようである。複合度の強弱という点でまとめると次のようになる。

連用修飾関係

連体修飾関係

1 居体言＋名詞

イ 主述関係が成立する

ロ 主述関係以外の関係が成立する

2 名詞・形容詞語幹＋名詞

この順序で、複合度が漸次強くなっていく。

(Ⅲ) 複合動詞 複合動詞の語構成を次の二つに分ける。

(1) 名詞・形容詞語幹＋動詞

(2) 動詞連用形＋動詞

(1) 名詞・形容詞語幹＋動詞 この場合も次の二つに分けて考えることにする。

(i) 先部が後部の主語となるもの

ナミタツ (漲) || 平平平上 (法上 30・7)

カゼフク (風) || 上上平上 (僧下 51・1)

カミオツ (霹靂) || 平平平上 (法下 60・6)

ハナサク (花) || 平平平上 (僧上 4・7)

ハラフクル (瘰) || 平平上上平 (法下 118・6)

(ii) 先部が後部の目的・手段などの修飾関係となるもの

クサギル (耘) || 平平上平 (法下 12・5)

サイギル (微) || 上上上平 (仏上 39・4)

モトゾク (本) || 平平上平 (仏下本 113・5)

イキヅク (煦) || 平上上平 (仏中 30・4)

イロドル (腰) || 平平上平 (仏中 122・6)

カタドル (象) || 上上上平 (僧下 108・6)

ハラバフ (蒲伏) || 平平上平 (僧上 19・2)

チカツク (戚) || 平平上平 (僧中 40・1)

ツカサドル (職) || 上上上上平 (僧下 102・1)

(i)は全て成素の原アクセントを残した型である。その中には安定型アクセントに偶然一致するものもある(動詞の安定型アクセントは○○●●・●●●●○○○○●●・●●●●○○型である)が、原アクセントを変化させて複合語アクセントを作っている例は一例も報告されない。それに対し(ii)は、後部の二類動詞が原アクセント●を変化させて、複合語アクセントを作っている。(ii)の中で、原アクセントを残したままの語は、もちろん数多く存在する。それらはこの場合省略した。

これらのことから言えるのは、(i)の場合より(ii)の場合の方が複合度が強いということではないか。動詞では多くの場合は複合していないと考えられるので、複合動詞を作りやすいと言った方がよいかもしれない。前に複合名詞で見たように、主述関係の語構成を持つ語よりもそれ以外の関係を持つ語の方が複合度が強かった。その結論が動詞の場合にも当てはまりそうだ。

(2) 動詞連用形＋動詞 この語構成は、ほとんどが原アクセントを残したままである。従って、複合動詞ではなしに、二語の連語の段階だと言えよう。ただ一例、次のようなものが報告される。

ザシノゾク(半面子) || 平上上上平(法上102・4)

「ノゾク」は一類動詞であるから、原アクセントは○○●。それが変化して複合語アクセントを作っている。他の「サシ」^シという形の動詞は全て原アクセントを残している。この例は、先部成素「サシ」がいち早く接頭語化した例かもしれない。

動詞の場合をまとめると、複合動詞とみなし得るのは「名詞・形容詞語幹＋動詞」の一部分であって、他はまだ二語の連語の段階である。複合動詞とみなしたのも、安定型アクセントに実現することから、複合度はさほど強くはなかったろう。

四、連濁と複合語アクセント

連濁とアクセント変化にはどのような関係があるか。両者の結びつきについて考えてみたいと思う。一見して、連濁とアクセント変化とは次のような関係がある。

クサギル(耘) || 平平上平(法下12・5)

クサキル(研) || 平平上平(法中3・7)

イロドル(腰) || 平平上平(仏中122・6)

イロトル(采) || 平平上平(仏下本89・6)

複合してアクセント変化を起こしている場合(平平上平型)には連濁現象も起っており、成素の原アクセントを残している場合(平平上型)には連濁現象は起こっていない。このように、アクセント変化と連濁とは、ともに複合の度合いを示す点で深い関係があ

る。

連濁は狭義の音韻や文法とも深いつながりがあり(例えば前部の最後が鼻音の時は連濁が起こりやすい、前部成素が後部の目的格の時は副詞修飾格の時より連濁しがたい、など)、アクセントとの関係だけを面的に考えることはできない。そのため連濁とアクセント変化との間に規則性を見出だすことは、非常に困難である。が、次のような傾向を認めることができると思う。

- (1) 複合語アクセントから見て、複合度の強いと思われる語は、連濁も起こしている。
- (2) 低平調・低音拍の続くような型では、連濁を起こさないことがある。
- (3) 連濁すべき拍が高音拍の場合、低音拍の場合に比べて連濁することが多い。

これらはいくまで傾向であって、必ずしもこの通りにいくものではない。次にそれぞれについて少々説明を加えておこう。

(1) について 先に安定型アクセントは比較的複合度の弱い複合語のとするアクセントだと述べた。それではここである「複合度の強い」複合アクセントとはどういうものか(動詞の場合複合度は全て弱いので、ここでは動詞は除く)。それはアクセント核を複合語の中央部に持って来ようとする型ではないか。つまり●●○○型ではないか。低起式の場合は、アクセントの上がり目を中央部に持って来る○○●●型ではないか。このような型を何故に複合度が強い型と決定したかと言うと、主に次のような理由による。このような型は、四音節名詞の中でも非一般的で、●●○○型が32例(549例中)、○○●●型が18例(549例中)報告される。原アクセントを保存し

て、たまたまこういう型になる語は別として、このような型は複合語として独自のアクセントを持つに至っていると言うことができよう。ということはつまり、複合度の強い、複合してから時間の経っている語だとも言えよう。そしてこれらの型に属する語を見てみると、

●●○○型 || ヤキガネ (鎌) (僧上 119・5)

カタガユ (體) (僧上 111・2)

タムザケ (甜酒) (僧下 56・2)

カハダケ (竹苦竹) (僧上 80・1)

ナヨダケ (簞竹) (僧上 73・7)

アラバコ (麗宮) (僧上 64・4)

フミバコ (箴) (法上 75・3)

ミカバチ (木蜂) (僧下 26・8)

アラブチ (碧潭) (図 17・3)

ミチバチ (蜜蜂) (法下 55・8)

ハヤブネ (舸) (仏下本 2・3)

コメザキ (糲) (法下 36・6)

オホバコ (半政) (僧上 7・6)

イシブシ (販) (僧下 4・2)

阿末比古 (百足) (図 102・2)

○○●●型

のように、たいていは連濁を起こしている。連濁現象から見ても ●○○・○○●●型のアクセントは、複合度の強い語の持つアクセントであること実証されたわけだ。

アクセント変化や連濁現象は、どちらも複合の度合いを示す手がかりとなるものであるから、複合度の強い語に両者が揃ってあらわ

れることは当然のことだとも言えよう。しかしまた、両者のうちの一方のみがあらわれることもあり得る。そういう場合には、連濁とアクセントとはどういう関係にあるのだろうか。

(2)について 連濁の当然予想される所で、連濁の起きていない場合がいくつかある。次にその例を挙げておく。

オホトリ (鵜) || 平平平平平 (僧中 113・2)

クロトリ (鴉) || 平平平平平 (僧中 119・2)

シルカユ (粥) || 平平平平平 (法下 38・1)

カラサケ (醋) || 平平平平平 (僧下 60・2)

ニゴリサケ (麴) || 平平平平平 (僧下 56・4)

ヌヒキヌ (絨) || 平平平平平 (法中 121・7)

オホクチノハカマ (大口袴) || 平平平平上××××× (僧中 15・5)

カラクラ (唐鞍) || 平平平平上 (僧中 72・4)

カラサホ (連枷) || 平平平平上 (仏下本 103・3)

ツラホネ (鰐) || 平平平平上 (仏下本 28・7)

都知波之 (圮) || 平平平平上 (図 221・6)

これらの非連濁形は何らかの形でアクセント変化を起こしているので、複合してはいないと考えられない。先部と後部との修飾関係や意味関係も考え合わせるべきだろうが、連濁しないことにアクセントが関係するのではないか。これらはいずれも、低平調かあるいは前部に低音拍の続く型を持つ。このことが連濁しないことと関係があるのではないか。高平調や高音拍の続くあとで、連濁が当然予想されるのに連濁しない場合も、もちろんある。例えば

モエクヒ (燼) || 上上上上上 (仏下末 41・3)

マガリカネ (曲尺) || 上上上上平平 (法下 92・2)

アリクサ (編蘆) ||上上上平 (僞上12・4)

ニハクサ (地葵) ||上上上平 (僞上19・4)

マキクサ (地葵) ||上上上平 (僞上19・4)

ヤイクサ (醫草) ||上上上平 (僞上4・2)

しかしこのような語は、低平調や低音拍の続く語の場合に比較して少数である。また後部成素「クサ」を持つ語に多いのは、アクセント以外の要素を思わせる。結局、低平調や低音拍の続く型では連濁が起こらないことがあるのではないか、という感が強い。なお低平調は四音節名詞の場合の安定型アクセントであったことも思いうかがわれる。低平調は複合度が弱かったために、連濁にまで至らないことがあったためか。

(3)について (3)は(2)を裏返したような意味だとも言える。次のような例があるので(3)という別項を立てた。

ツキグサ (鴨頭草) ||上上上平 (僞上3・1)

メドクサ (蒼管) ||去上上平 (法下53・8)

アマザクメ (天探女) ||平平上上上 (仏中6・3)

ホホヂカラ (稊) ||平平上上平 (法下23・3)

イキボトケ (神仙) ||平平上上上 (仏上7・3)

オホガシラナリ (欺猿) ||平平上上上×× (仏下本129・2)

カシキガテ (飢) ||平平上上上 (僞上106・7)

最後の三例はみな○○●●型というめずらしい型をとり、いずれも連濁している。これは五音節名詞における複合度の強い型だから連濁しているとも言えるかもしれない。しかし卓立型の前掲の例を見ると、高音拍と連濁する拍とは無関係とは思えない。つまり高音拍で連濁が起こりやすいということが言えるのではないか。因みに

連濁する拍のアクセントを全て調べてみると、四音節名詞では高音拍で82例、低音拍で87例と大差はないが、五音節名詞となると、高音拍で連濁現象の起きたのが53例、低音拍で28例と高音拍で連濁する場合が二倍近くに多くなっている。四音節名詞でこのような数値が出たのは、安定型アクセント○○○○型が、四音節名詞全体の約四分の一強を占め、そのため低平調で連濁する語がかなり存在するためである。四音節名詞では考慮がまだ必要であるが、五音節名詞になると、明かに高音拍で連濁傾向が見えると言えるのではなかろうか。

連濁とアクセントとの関係はまだ問題点が残り、極めて大まかな傾向しか導き出すことができなかった。しかしこれからはまだ手始めであって、さらに研究を進めることによって新たな関係が導き出せるかもしれない。以降の研究に俟ちたい。

五、おわりに

本稿では今まで述べてきたように、複合語アクセントを語構成・連濁に照点をあてて見てきたが、以降の課題としては次のようなことが挙げられる。

(1) 語構成と複合語アクセントでは、今回はごく大きな区分しかしなかったが、もっと細かに見ていく必要があるのではないかと。

(2) 連濁と複合語アクセントでは、音韻的要素や文法的構成要素などの別の要素との関連をもっと考えるべきではないか。今回はアクセント要素のみを見すぎた嫌いがある。

(2)について少し説明を加えておく。音韻的要素とアクセント的要素

を比べると、連濁に関しては音韻的要素の方が支配的である。例えば、先部成素の最終拍が鼻音の場合はアクセントの如何にかかわらず連濁する。文法的要素とアクセントの要素となるといちがいどころとも言えなくなる。例えば先部成素が後部成素の目的格になる場合を考えると、「ツチスリ（腴）」や「スソツケ（欄衫）」、「ムギスキヒ（飛簾）」などはアクセントの如何を問わず連濁しないので、文法的要素が支配的だとも言えそう。しかし「カミゾリ（剃刀）」、「サキバラヒ（前駆）」などは連濁していて、いちがいに文法的要素が支配的だとは言えそうにない。いずれにしてもアクセントを形態的に見ていくことの意義は、まだまだありそうに思う。

末筆ながら、この稿を成すに当たり御指導を賜わった奥村三雄先生はじめ先生方、諸先輩方に感謝申し上げ、更なる御教示をお願いする次第である。

注

注1 「現代諸方言の比較から綴た平安朝アクセント」（『方言』第七集）

注2 当時のアクセントでは、動詞連用形と連用形から派生した居体言との間に次のような関係がある。このことは、南不二男氏「名義抄時代の京都方言に於ける二字四段活用動詞のアクセント」（『国語学』二七）に詳しい。

第一類 第二類

連用形 ●● ○○
居体言 ●● ○○

注3 「名詞」とある場合、形容詞語幹を含むこともある。

注4 阪倉篤義氏「語構成の研究」に詳しい。

注5 特別にことわらないで「法下」「僧中」などある場合は、観智院本の巻名を示す。それ以外の諸本の場合は、図（図書寮本）、高（高山寺本）、鎮（鎮国守国神社本）の略号を用いる。なお数字は順にページ数と行数とをあらわす。

望月郁子氏編「類聚名義抄四種声点付和訓集成」との関係から、観智院本は貴重図書複製会本のページ数と行数とで示した。

注6 国語学会編『国語学辞典』の「連濁」の項による。